

金剛乘における複数のヴァジラパーニについて

静 春樹

後期インド仏教世界の地勢と時輪教の誕生

後期インド仏教、より具体的にはインド金剛乗¹の研究は、梵語写本の発見・同定・校訂・翻訳などの進捗により目まぐるしい展開を見せている。その一方で、研究の進展があまり見られない分野もある。ここでは時輪教の誕生に先立つ後期インド仏教について筆者が重要と考えるいくつかの問題点を挙げてみたい。

まず、後期インド仏教の時代には、初期・中期の大乘經典に集約される思想を核とする既存の「大乘」とは別な発想およびそれに基づく実践内容（真言理趣, *mantranaya*）を表現した数多くのタントラ群が作成され続けた。このタントラを作成しその思想を鼓吹したグループの先端部分は、自らを「最勝の大乘である金剛乘（*Vajrayāna*）」と名乗り、それ以前・以外の「大乘」を「波羅蜜乘（*Pāramitāyāna*）」「経部大乘」「因乘」「共の大乘（通大乘）」などと呼んでいる。自らのアイデンティティを大乘に置く集団の下位分類である「波羅蜜乘」と「金剛乘」の二つのカテゴリーは有効な分析概念であるが、現実では、個々の大乘信解者にとっては、両者に対する態度は広範な「温度差」の分布を示すはずである。この「波羅蜜乘」と「金剛乘」の関係の具体相がこれまでの研究では、ほとんど手付かずの分野であり、大きな謎のままで残されている。同時に、関係資料がほとんど残されていないこともこの分野の研究を難しくしている。

つぎに、タントラ分類法に関しては、これまでの所作・行・瑜伽・無上瑜伽の四階梯分類に対して、インドの典籍をより正しく反映した所作・行・瑜伽・最上瑜伽・般若母の五階梯説が受け入れられてきている。これらは、モデルとして有効なタントラ分類であるとしても、それは諸のタントラを歴史的発展段階として捉えることではない。各階梯に分類されたタントラを信解し実践したグループの実情やその相対的力関係は別に取り上げる必要があると考える。例えば、所作タントラに括られる傾向は、いわゆる「無上瑜伽」階梯が展開した時代にあっても根強く残ったと考えられる。それは所作タントラを宗教実践の中心に据えているグループが一部の金剛乘の阿闍梨によって声聞乘の信解者と一括りにされた上で、仏教徒の外道（*buddhatīrtika*）とまで呼ばれ弾劾されている発言からも知られる²。そこでは、彼らはタントリストの集会（聚会）から排除されるべきであるとされている。

ジュニャーナパーダの思想と事績を研究した羽田野伯猷の指摘では、瑜伽タントラ階梯からの最上瑜伽階梯の誕生、具体的には『真実撰経』から『秘密集会タントラ』（GS）への展開と両者の並存は、約半世紀の短い期間の出来事であった³。「経部大乘」の学匠ハリバドラの下での就学時代から『大口伝書』に至るまでの亜大陸各地を遍歴して修

行するジュニャーナパーダの伝記⁴は、八・九世紀の金剛乗の宗教的地勢を垣間見せてくれる貴重な資料である。瑜伽階梯から展開した最上瑜伽階梯が仏教徒の世界で市民権を得ると平行して、瑜伽行者たちがシヴァ教の母神崇拜を仏教ヴァージョンに変換し、最上瑜伽階梯が知らない諸の実践内容を取り込み仏教理論で上書きし換骨奪胎する過程で般若母タントラ群が出現する。そこにも呪術・呪法オンパレードの『チャクラサンヴァラタントラ』（CS）を一方の極とし、呪法と並んでタントラ仏教の理論的立脚点も前面に出す『ヘーヴァジラタントラ』（HV）を他方の極としてその間に諸タントラの幅広い分布が見られる。この瑜伽母タントラの二つの根本タントラについても、先後関係・相互関係の問題を始めとする多くが疑問のままで残されている。最上瑜伽（父タントラ）と般若母タントラの統一的理解が仏教タントリストたちの深刻な課題であったことは既に論じた⁵ 両者の統一的理解により金剛乗の枠組みは拡大し実践内容も豊富になる。そして、つぎに金剛乗の内部で起こった大問題が、『一万二千頌最勝本初仏タントラ』（Paramādibuddhatantra, 『最勝本初仏』）を所依の根本タントラと主張する時輪教の出現である。これは十世紀末から十一世紀の初頭にかけて起こった大事件であった。GSがその冒頭のセンセーショナルな発言⁶で「大きな物語」の上書きを始めたように、時輪教のそれは、「シャンバラ国」のカルキ（支配者）スチャンドラ（Sucandra）が正法を積尊に請問することから始まる。新しい思想潮流に対して既存の集団がその受容に抵抗するのは、古今東西に渡って広く見られる現象である。時輪教に対する既存勢力の冷ややかな反応が少し時代を下ったアバヤーカラグプタ（* 1064~1125）の時代にも見られたことを彼は Āmnāyamañjarī で出している⁷。時輪教の歴史については、実際に行われたタントラの制作とその伝播は分厚い神話と伝説のヴェールに覆われ、チベット人の書いた歴史書・宗義書の錯綜した伝承が残されている。インドにおける時輪教誕生の時期を比定するのに重要と思われる言及が『略カーラチャクラタントラ』（LKC）とその註釈書『無垢光』（VP）にある。学者たちはそこに出るヒジュラ暦（イスラム暦）403年が西暦1024(25)年もしくは1026(27)年に当たることを算出した。このLKC自身が語る年が時輪教成立にとって決定的な意味をもつことでは、研究者の間に異論はない。相違は、この西暦年（1024 or 1026）を干支による60周年暦の上限とするか下限とするかである⁸。どちらの意見をとるにしろ、この西暦年を含む1020年代が時輪教成立にとって決定的であることは変わらない。時輪教の研究が始まって以来、多くの事実が解明された。とくに、根本タントラ『最勝本初仏』に関して、それが他の流派が存在を主張する「根本タントラ」とは事情を異にして、その内の一章であることが明らかな『灌頂略説』（Sekoddeśa, 略SU）以外にも、かなりの数の章句が実際に何らかの形で流通した典籍であったことが明らかになった⁹。そこには当然ながら作者がいる。しかし、根本タントラ自体の問題を含め、LKCとVPの成立年代の正確な同定および文殊の化身とされるヤシャ王と観自在の化身と自称する作者プンダリーカの本名やその事績を始めとする核心部分は、現在に至るも解明を待っている状態である¹⁰。

複数のヴァジラパーニ存在の可能性

後期インド仏教で、在俗瑜伽行者と僧院の比丘からなる「二極構造」として存在してきた金剛乗において、僧院の内外に跨る貪欲行 (rāgacaryā) を核とする金剛乗に固有の実践を主宰するのが金剛阿闍梨である。儀軌が語るところ、その地位は高く、それに付随する利得も大きい¹¹。範疇としてある三種の阿闍梨 (比丘・沙弥・在家) の内で、「かつて比丘であったが、灌頂を受けて持金剛者となった阿闍梨が最上である」と規定し、比丘のアイデンティティをもつ阿闍梨の優位を主張する一方で、神通・実務才能の有無という能力主義を導入するのが **Laghusaṃvaratantraṭikā (LTṬ)** の作者ヴァジラパーニ (生没年不明、十世紀後半～十一世紀前半生存) である。同書の校訂出版をした **Claudio Cicuzza** は、この人物を時輪教の最初期に位置する人物とする一方で、個人的な事績について知られていることはほとんどないと書く。

他方で、チベット人の歴史書によれば、マイトリパ (Maitripa, 別名アドヴァヤヴァジラ) の四大弟子の一人で、師匠のマハームドラー説を祖述・敷衍し **Guruparamparakramopadeśa (GPU)** を作成したヴァジラパーニ (生年 1017, 没年不明) がいる。この人物はチベット人訳経師たちと翻訳作業に携わり、**Vajrapāni** もしくは **Phyag na rdo rje** の名でマイトリパの著作の多くと自著の翻訳者 (監修者) として西藏大蔵経に名を残し、その数は 35 本にのぼる。そのチベット人訳経師の中には、アティシャに 19 年間師事したナクツォ・ツルティム・ゲルワ (1011~1064) もいる。このヴァジラパーニ自身もネパール・チベットへ巡錫したと記されているとお目鼻立ちを具えた歴史的人物である。これまでの研究では、こうしたヴァジラパーニとして出る典籍作者の同定作業が行われておらず、漠然と同一人物として扱われてきた傾向があることは否定できない。**Cicuzza** もこの時輪教へと繋がる **LTṬ** の作者ヴァジラパーニとマハームドラーを釈説するヴァジラパーニを同一人物であるとする一方で、生没年代を異にする別人物としか考えられないと首尾一貫しない意見を述べている¹²。後期インド仏教の掉尾を飾った金剛乗の現実の姿の解明に一步でも近づきたい筆者にとって、その運動体の組織原則・一般ルールを提起した **LTṬ** の作者ヴァジラパーニの活躍年代と金剛乗内部における位置づけは緊喫の課題となる。そのためにも、この「ヴァジラパーニ複数説」の検討は避けて通ることができない。歴史資料が限定されている以上、取り得る手段は、ヴァジラパーニの名で残されている諸著作の思想内容・構造自体を検討することとなる。

ヴァジラパーニの著作 (1)

現行のチベット大蔵経には、作者名にヴァジラパーニの名を冠する著作が 9 本存在する¹³。本稿は、まずその内で、**LTṬ** と **GPU** の二つを取り上げる。**LTṬ** は、デルゲ版にして 32 葉、**CS** 第一章冒頭の 10 偈半への意趣積の形をとった金剛乗の理論・実践の開陳である。この著作およびその作者と時輪教との関係、時輪教史への位置づけ

は明らかではない。チベット人による時輪教の伝承では、**LTT** はヴァジラガルバの *Hevajratantrapiṇḍārthaṭīkā* (**HTPT**)・**VP** と並んで「菩薩の三部作」と呼ばれて時輪教の基本的典籍と位置づけられている。しかし、**CS** の註釈書と自己規定する同書にカーラチャクラ尊への敬礼文、スチャンドラの釈尊への請問に始まる時輪教成立の神話、「シャンバラ国」の歴史（伝説）の記述は当然ながら見られない。しかし、逆に **LTT** が取り上げるテーマが **VP** で再論されている場合も多い。**VP** 自体が語るようにヴァジラパーニと **LTT** がその成立前史で大きな役割を演じたことは間違いない¹⁴。

一方、**GPU** はデルゲ版にして 15 葉ほどで、金剛乗の立場からする外教への批判も含めたその時代までのインド仏教の教理・思想の総合的な教相判釈である。インド仏教思想史を把握するための全体的構成と「教相判釈」的な内容が、大枠で師匠であるマイトリパの諸著作、とくに **Tattvaratnāvalī** を踏襲している¹⁵ ことから、同書はマイトリパの四大弟子に数えられるヴァジラパーニの作と考えて間違いないであろう。同書の纏まった研究としては、磯田熙文の「*pāramitā-yāna* と *mantra-yāna*」がある。二つの著作の意図が根本で大きく異なることから、金剛乗の土俵上にあるとは言え、両者の単純な比較は困難である。そこで筆者は、無上瑜伽タントラが展開した「二次第」「印契」「灌頂」「四歓喜」といった基軸となる概念を選び出し、これらに関する **LTT** と **GPU** における相違を検討する。それを通して、この基軸概念の扱い方をめぐる相違を寸描したい。これらの枠組みと方法論は両テキストが構築されるに際しても根幹に関わる概念となっているため、同一人物が理論構成に当たって、思想の基本的骨組みを簡単に変更できるとは考えにくい。仮にそうした思想的変遷が同一人物に起こったとして、それを示唆する中間項や *missing link* を示す典籍が見当たらないこともその理由である。こうして両書を比較検討することで、二著作の作者が別人物であると考えるのが理に適っていることを明らかにしたい。それによって、時輪教が鮮明にした教理面や実践上の新しい思想、および、その結果として時輪教がもった金剛乘におけるユニークな立ち位置に迫る基礎作業の一つとしたい。

LTT と **GPU** における枠組みの相違

1. **LTT** からの引用

ここ (**CS**) では、金剛摩尼に到った菩提心が「内に趣入した意」と述べられている。その内に趣入した意によって、流失されない菩提心によって、羯磨印または智印との交会において、三界の特相を仏の影像であると観想すべきであるとは、欲界と色界と無色界を特相とし静と動の存在を自性として一切の相を円満具足する三界を瑜伽者は余すところなく修習すべきである。まさにそれは、一切相を円満具足した般若波羅蜜であり、それもこのタントラでは、愛欲悉地であると世尊が仰っていて、般若母タントラであるが故である。その愛欲悉地を瑜伽者は修習すべきである。ここでは、愛欲は大貪欲で、金剛薩埵は大利益で最勝不壊である。悉地は (p.124) 大印契であり一

切相を円満具足した般若波羅蜜である。この故に、愛欲は対象のない大慈悲であり、悉地は対象をもつ大空性であるとは、瑜伽者たちによる自證であるが故であって、羯磨印や智印の悉地よりもさらに優れた悉地である。一切智者性と一切相智性と道智性と道相智性と十力と四無畏など仏徳の全てを授与するその大印の愛欲悉地を、仏果のために修習すべきであると言うのが、別のタントラにおける如来の決定である¹⁶。

また、大樂増大のために羯磨印と智印を完全に放擲して大印契を修習すべきである。ここで、羯磨印と智印の修習の否定は世尊が『一万二千頌最勝本初仏』で説いている。それも以下のごとく、「羯磨印と構想された智印を完全に遠離して、最勝不壞の瑜伽によって大印契を修習すべし」と言われている¹⁷。

ここで般若と方便を自性とするタントラ王において、凡夫たちを獲得する目的で、羯磨印の随貪欲によって生じた二根からの変壞する樂を般若智であると確かに世尊が世俗諦として説いているけれども、それは勝義諦としてではないのである¹⁸。

ここで、般若母の支分（母タントラ）では、世間と出世間の真理による灌頂は四つである。それらの内で三つは世間世俗であり、第四は勝義であると言われる。それは瑜伽によって理解すべきであり、正しい上師の口訣から勝義諦によって證得すべきである。同様に、『秘密 集会続〔タントラ〕』でも世尊が仰っていて、「このタントラでは、灌頂に三種の区別があると知られている。第一は瓶灌頂であり、第二は秘密灌頂であり、第三は般若智〔灌頂〕であり、第四もそれと同様である」¹⁹と言わる。四灌頂は『ヘーヴァジラ〔タントラ〕』などで、「阿闍梨・秘密・般若智と第四もそれと同様である」²⁰ (p.126) と言われている。つまり両方のタントラにおいて、灌頂は四つであり、灌頂の順番が述べられているからである。それらは、まず歓喜などの刹那を吟味していることではない。同様に、『幻網』などでも、「智者たちは水などの七灌頂それぞれを個別に證得すべし」と言われ、同様に、『最勝 本初仏』で世尊が仰っていて、「王よ、水・宝冠・繒綵・金剛杵と鈴・大禁戒・名・許可を正しく具えた七種灌頂である」²¹と『最勝 本初仏』などで〔言われている〕。それ故、瓶灌頂は七種灌頂とは別立ての上位である。または、阿闍梨灌頂は、最上の三つの内の最初であり、第二は秘密灌頂である。般若智が第三の灌頂である。それら最上の三つのさらに最上である第四は、「それも同様の」出世間の灌頂である。このように、灌頂の順が述べられているが故に、灌頂は四つであって、身と語と心と智慧を浄化するために世尊が説かれたのである。これらについては、二諦（世俗諦と勝義諦）からしても第四灌頂は俱生歓喜とはならない。もしそうだとすれば、四つ〔の灌頂〕は諸歓喜の順番となるであろう。仮にそうだとすれば、〔初〕 歓喜は瓶灌頂となる。最勝歓喜は秘密灌頂となる。離歓喜は般若智灌頂となる。俱生歓喜は第四の「それも同様の」灌頂となる。従って、歓喜などの刹那の区分によって諸の灌頂は建立されるのではないと言うのは、そのような〔灌頂が歓喜の刹那の

次第で建立される] ことは決してないのである。ここでは、世間世俗諦として、瓶による灌頂は阿闍梨灌頂である。秘密と見做して甘露を享受することで秘密灌頂である。羯磨印を〔弟子に〕授けて〔等至により〕二根から生じる変壊する楽を覚知することによって般若智灌頂である。摩尼の中に到った菩提心の楽を覚知することで第四の般若智による灌頂であると言われて、世間の真理による未了義としての灌頂の儀軌は四種である。勝義としては、これも疑わしくて、無意味である。ここでもし、最初の瓶灌頂で弟子が阿闍梨となっているならば、秘密と般若智と第四において、この者はいったい何になると言うのか。阿闍梨位とは持金剛位の名であって、一体どうして、最初の瓶灌頂で灌頂された者が阿闍梨と言われようか。これは愚者たちの迷乱であるから、それは論理によって承認されないのである。

ここで、別のタントラ（『最勝本初仏』）では、別の秘密語によって、了義として、瓶の語で〔般若母の〕乳房が述べられる。それに触れることから〔生じる〕変壊する楽が瓶灌頂である。秘密については、金剛杵の攪拌（*āsphālana*）から〔生じる〕楽が秘密灌頂である。二根の等至で〔生じる〕振動する楽（*spandasukha*）が般若智灌頂である。大印の随貪欲によって〔生じる〕不壊の楽が第四であって、「それも同様の灌頂」である。（p.127）このように、変壊（tib. 'jig pa）と変壊（tib. 'gyur ba）と振動（*spanda*）と不動（*niḥspanda*）の区別によって灌頂は四つである。これにより灌頂されることが灌頂である。楽の心が作られると言う意味である。ここで、世尊が『最勝本初仏』で仰っていて、「第一に七灌頂なるものは凡夫たちの趣入〔のため〕である。世間世俗諦として三種であり、勝義として第四である²²。また瓶と秘密と般若智と言われるものと、さらにその大般若が智慧と言われる。変壊と変壊と、つぎに振動、つぎに不動の最勝である。三灌頂の順番で身語心を修治する。第四は智慧の浄化であって、身語心を修治するものである²³」と言われていた。その故に灌頂は四つである。これら各別の灌頂について歓喜は四つずつである。それぞれの歓喜には身・語・心・智慧の区分によって四住位があって、四つの心滴の区分がその理由である。つまり、十六部分の区分によって灌頂それぞれに歓喜は十六であって、心・語・心・智慧の四心滴の区別によってである²⁴。

同書（『ダーキニー金剛網』）第十五品でも、「第一が水灌頂、第二が宝冠灌頂、第三は繪綵灌頂であり、第四は金剛杵と鈴である。第五は尊主、名灌頂が第六で、仏の許可が第七灌頂、瓶灌頂が第八であって、第九が秘密灌頂である。第十は般若灌頂である。真実と金剛の正しい結合によってすべての金剛禁戒を与えるべし。説示者自らがこの灌頂儀軌を教示するのである。阿闍梨を付度すべきでなく、如来の教勅を越えてはならない²⁵」と言われていた。このように、第十一の灌頂が「真実と金剛の正しい結合により」根本であるとの世尊の明白な教勅から智者たちは、第四灌頂あるいは第十一〔の灌頂〕は別立てとして了知すべきである。このように、解脱を願う者たちは正しいグルの教誡によって、多聞によって、タントラは別のタントラ（『最勝本初仏』）

によって全てを了知すべきであると言うのであり、内に趣入した意による大印修習の灌頂の儀則が世尊によって説かれた²⁶。

2. GPU からの引用

灌頂についても二つであり、人為的な世間灌頂と非人為的な出世間灌頂である。人為的な世間灌頂は三つであり、阿闍梨灌頂と秘密灌頂と般若智灌頂である。非人為的〔な灌頂〕は二つであり、法印（* dharmamudrā）と大印である第四〔灌頂〕である²⁷。

つぎに、外の生起次第である金剛阿闍梨灌頂²⁸は身清浄を釈説するのであり、水（udaka）灌頂（udakābhiṣeka）・宝冠灌頂（mukuṭa）・金剛杵（vajra）・鈴（ghaṇṭā）・名（nāma）・三昧（金剛杵・鈴・印）の三昧耶（vajragañṭānamamudrā-samaya）・応器（bhavyatā）・許可（anujñā）・金剛禁戒（vajravrata）・授記（vyākaraṇa）・安息（āsvāsa）で十一である²⁹。

さて、如来の安息である〔内〕甚深の生起次第と〔持金剛の安息である〕究竟次第などの説示のために、五つの次第が四印に集まるのであり、羯磨印・法印・大印・三昧耶印である。その内、上根を意趣して羯磨印に二次第が集まるのである。羯磨印〔との瑜伽〕の時には、凡俗の想念では説かれていないから、〔羯磨印は〕尊格を本性とすると観想しながら虚空秘密を加持するのが外的生起次第である。（P195b）つぎに、bola と kakkola を摩擦しながら瑜伽によって如来の安息であれ持金剛の安息であれ、俱生智の自證を知覚することが内甚深の生起次第である。このように、羯磨印は、二次第（外的と内甚深の生起次第）をもつから、次第は四つに集まるのであり、羯磨印はその例喩である。法印は成次第であり道である。大印は円成次第であり果である。三昧耶印は等至と後得〔智〕であって、法身と色身が無二・双運であると示すのが自性次第であり、利他として生じたものである³⁰。

「抱擁と接吻などは（P196b）多様相（vicitrakāra）であるから多様とされる。異熟（vipāka）はその逆である。楽の知を食すからである。私は楽を食したという知覚が摩滅（vimardana）と語られる。離相（vilakṣaṇa）は〔前の〕三つとは異なり食欲と離食欲を離れている」³¹と説かれた偈頌によって、先に説かれた俱生を食すことが知覚であり、その後の第四の離歡喜の時に、最上であると考察し吟味するのであり、〔それは〕まさしく分別であるから、無分別として成立していないのである。（略）以下の言葉で、「多様は初歡喜、異熟は最勝歡喜、摩滅は離歡喜、離相が俱生〔歡喜〕」³²と説かれている理由で、離歡喜はまさに磨滅の刹那と説かれるのである。摩滅は有分別であるから離歡喜も有分別であると知るべきである。（略）従って、離歡喜は順番では数えて第三とされている（D175a）が意味上は第四に理解すべきである。俱生〔歡喜〕は数えて第四とされているが、意味上は第三と知るべきである。〔論難者が〕、それで

は、諸タントラの中で正しい灌頂次第が俱生〔歓喜〕を第三としていないのは何故かと言うならば、〔答釈しよう〕。そうではないのであって、(P197a) 書物での智者や外道などの智者たちがグルに歓待せずに言葉によって文言を決択したのであって、認識手段の意味を決択してから、甚深なマントラの意味と灌頂をなす者たちを否定するためにタントラの中で〔順番を〕混交したのである³³。

大印も歓喜は四つに区別されるのかと言うならば、そうではない。三印(羯磨印・法印・三昧耶印)について歓喜は四つに区分されるが、大印についてはそうではないのである。それは何故かと言えば、大印は離垢の果であって、その故に、有垢の三刹那がここでは生じないから、それによる区分である三歓喜もこれには生じない。従って、歓喜を四つに分けないのである³⁴。

LTṬ と GPU の構造の分析

1) 「次第」 建立についての相違

LTṬ は二次第のまま（生起次第・究竟次第）

GPU は二次第を五次第に開く

〈生起次第〉 外の生起次第・内甚深の生起次第（羯磨印）

〈究竟次第〉 成次第（法印）・円成次第（大印）・自性次第

2) 「印契」 建立についての相違（数と名称と順序）

LTṬ は三印（羯磨印・智印・大印）

GPU は四印（羯磨印・法印・大印・三昧耶印）

用語の問題として、**LTṬ** が智印 (jñānamudrā) を出す位置に **GPU** は法印 (*dharmamudrā) を出す点に留意する必要がある。

3) 灌頂体系における相違

LTṬ

世間の灌頂

七種灌頂 (saptābhiṣeka, 水・宝冠・金剛杵・鈴・禁戒・名・許可)

最上の三種灌頂 (uttarābhiṣekatrāyam, 瓶・秘密・般若智)

出世間の灌頂（最上の最上である第四灌頂）

GPU

〈世間の灌頂〉（人為的）

阿闍梨灌頂（水・宝冠・金剛杵・鈴・名・三族の三昧耶・応器・許可・金剛禁戒・授記・安息の十一種）（外の生起次第）

秘密灌頂

般若智灌頂
 〈出世間の灌頂〉 出世間の灌頂（非人為的）
 法印灌頂
 大印灌頂

4) 「四歡喜」体系における順序の相違

LTT は歡喜・最勝歡喜・離歡喜・俱生歡喜の定説を離れない

GPU は歡喜・最勝歡喜・俱生歡喜・離歡喜が本義とする

LTT の主張は、「両方のタントラ（**GS** と **HV**）において、灌頂は四つであり、灌頂の順番が述べられているからである。それらは、まず歡喜などの刹那を吟味していることではない」との言明にある。**LTT** は、瓶灌頂 — 歡喜、秘密灌頂 — 最勝歡喜、般若智灌頂 — 離歡喜、第四灌頂 — 俱生歡喜の組み合わせと順番を仮に認めた上で、異なるタントラに随順する者たちの間で完全な意見の一致は見られないものの大方の標準的な共通理解となっている「四灌頂・四歡喜」理解の意味変更を持ち出す。その好例が、性瑜伽における女性パートナーの乳房を瓶と見做して、それに触れることによって生じる樂の證得を瓶灌頂とする独自の解釈である。瓶灌頂は身の浄化にあたり、**LTT** では、四灌頂の目的は身・語・心・智慧の浄化である。**LTT** では、**GPU** が論じる四歡喜の順番の問題、つまり離歡喜と俱生歡喜の順番変更の主張は見られない。

一方、**GPU** は灌頂を「間違った灌頂・劣った灌頂・正しい灌頂」の三種に分ける。ここでは、上記の引用で「刹那 (kṣaṇa) による区分である歡喜 (ānanda)」とある通り、**GPU** の方法は、「歡喜などの刹那を吟味していることではない」「歡喜などの刹那の区分によって諸の灌頂は建立されない」とする **LTT** とはアプローチを異にする。**GPU** は灌頂についてではなく、四印契について四歡喜を検討する態度である。**GPU** は、「離歡喜は順番では数えて第三とされているが意味上は第四に理解すべきである。俱生〔歡喜〕は数えて第四とされているが、意味上は第三と知るべきである」とする。**GPU** が四歡喜の順について「歡喜・最勝歡喜・俱生歡喜・離歡喜」が正当であるとするのは、「そのような大印から有情のために果である二つの色身（へールカと明妃）が生じるのが三昧耶印と釈される」³⁵ とあるとおり、大印契を成就して無分別智が得られたとしても、法身として涅槃に留まることなく有情利益のために三昧耶身を現じる立場と不可分である。これは経部大乘の論師たちが出した無住处涅槃の理念であり、その理念を強調した **GPU** の作者は、**HV** が説く歡喜・最勝歡喜・離歡喜・俱生歡喜の順番はその理念とはそぐわないと考えたものであろう。しかし、**LTT** と **GPU** のさらなる比較検討は別の機会に譲ることにする。

ヴァジラパーニの著作（2）

これまで、西藏大蔵經に見在するヴァジラパーニの名をもつ九本の典籍の中で、**LT†**と**GPU**について検討し、両書の作者は別人としか考えられないとの結論に至った。つぎに、残る七本の内、Toh 1364『六支瑜伽』とToh 1426『真実心髓成就』の二本は**LT†**の作者ヴァジラパーニの著書である。『六支瑜伽』は冒頭の敬礼文に続いて本論の記述に入り、奥書の直前に至る（Pa183b3-187a7）。同書のサンスクリット原典の現存は不明であるが、内容は**LT†**の当該箇所（pp.135L11~143L13）のチベット語異訳である。**LT†**の翻訳者がRab 'byor zhi baとTing nge 'dzin bzang poの二人であるのに対して、ここでの訳者は、Ting nge 'dzin bzang poのみとなっている。『真実心髓成就』は**CS**に依拠して作成された成就法である。教証として『最勝本初仏』からの**LT†**と同じ引用をもち、註釈部分でも**LT†**と同じ文言をもつ。さらにチベット語訳が時輪教で有名な阿闍梨Somanāthaであることから、同書の作者は**LT†**の作者ヴァジラパーニであることはまず間違いないであろう。他方で、Toh 2299『修習六次第』はNag tshoとの翻訳の協業であることから、著者は**GPU**の作者と同じ可能性が高い。Toh 2255『金剛句』は、内容が**HV**に依拠した小編であり、チベット語訳は著者ヴァジラパーニとチベット人Jñānakaraとの協業である。構成が四印契の枠組みとなっていることから、著者は**GPU**の作者であると考えてよい。以上の検討から、残る三本の作者の同定は今後の課題である。

小結

LT†の作者は時輪教の事実上の根本典籍**LKC**および**VP**を著した人物たち（自称では「シャンバラ国」のヤシャ王とその息子プンダリーカ）に繋がっていく人物である。Cicuzzaの研究により、私たちは、『最勝本初仏』—**LT†**—**HTP†**—**LKC**—**VP**の相対年代を手にした。**HV**の註釈書『金剛句心髓集難語釈』（Vajrapadasārasaṃgrahapañjikā）はこれらの典籍からの引用を用いて、つまり、**LT†**の作者が繰り返して持ち出す「タントラを別なタントラで註釈する」手法によって**CS**の註釈が同時に時輪教の金剛乗世界への宣布の役割を遂行している。これまでの時輪教の研究者によって、『金剛句心髓集難語釈』の作者は、『最勝本初仏』の一部を構成する**SU**の註釈書Paramārthasaṃgrahaを作成したNāropaであるとされている³⁶。Nāropaの没年が1040年であることはまず間違いない。そうだとすれば、**LKC**の作者ヤシャ王・**VP**の作者プンダリーカの同定問題は別として、両典籍の成立が1040年を遡ることは明らかである³⁷。仮に**LKC**・**VP**の成立の範囲を1027プラスマイナス10年とすれば、1017~1037の数字となる。そして、**LT†**は**LKC**・**VP**に先行して成立している。そこから、**LT†**の作者ヴァジラパーニは、1017年生まれの同名の阿闍梨と同人物ではありえないことになる。本稿で引用を出した**GPU**の作者は、その理論構成の大枠・用語・カテゴリーの階層などの全面に亘って

LTT の作者とは相違が見られる。**GS** 以来の時を経て大枠では一応の纏まりをみせている金剛乗のメインストリームに新たな問題提起をしたのが時輪教である。**GPU** には時輪教に繋がっていく要素は皆無であり、同書の作者は、師匠アドヴァヤヴァジラが打ち出したインド仏教総括理論の延長上にあつて、そのさらなる展開を試みた人物であると概括できる。

一次文献・略号

Āmnāyamañjarī: *Samputatantrarājaṭīkāmnāyamañjarī* by Abhayākaragupta, Toh 1198.

D: デルゲ版西蔵大蔵経 (Toh)

GPU: Guruparamparakramopadeśa, Bla ma brgyud pa'i rim pa'i man ngag ces bya ba, Toh 3716, Ota 4539.

GS: Guhyasamājatantra: 松長有慶, 『秘密集会タントラ校訂梵本』東方出版, 1978., Toh 442, 443.

LTT: *The Laghutantraṭīkā* by Vajrapāṇi, ed. Cicuzza C., Serie Orientale Roma vol.86, 2001.

P: 北京版西蔵大蔵経 (Ota)

麗華: *Sukusuma-dvikramatattvabhāvanāmukhāgamavṛtti* by Vitapāda, Toh 1866.

RBTS, Rare Buddhist Text Series, Central Institute of Higher Tibetan Studies in Sarnath.

SU: Sekoddeśa: *Sekoddeśa A Critical Edition of the Tibetan Translation with an Appendix by Raniero Gnoli on the Sanskrit Text*, Orofino G., Serie Orientale Roma vol.72, 1994.

VP: *Vimalaprabhā* by Puṇḍarīka, ed. Dwivedi, V. and Bahulkar, S., RBTS 12, 1986., Toh 1347.

Vajrāvalī: *Vajrāvalī of Abhayākaragupta*, ed. Mori, M., Buddhica Britannica Series Continua, The Institute of Buddhist Studies, Tring, UK, 2009.

二次文献

磯田熙文 「Ṣaḍaṅga-yoga をめぐって」『印度学仏教学研究』25-1, 1976.

「pāramitā-yāna と mantra-yāna」『東北大学文学部研究年報』28, 1978.

宇井伯寿 『大乘仏典の研究 1』岩波書店, 1979(1963).

大観慈聖 「『金剛句心髓集難語釈』の引用文献について: ナーローパの思想的立場をめぐって」『密教文化』237, 2016.

桜井宗信 『インド密教儀礼研究』法蔵館, 1996.

静春樹 『ガナチャクラと金剛乗』起信書房, 2015.

「時輪教の先駆者ヴァジラパーニと後期インド仏教世界の規律: 勇者の饗宴儀礼再考」『印度学仏教学研究』66-1, 2018.

羽田野伯猷 「秘密集タントラにおけるジュニャーナパーダ流について」『チベット・インド学集成 第三巻』法蔵館, 1987.

密教聖典研究会 「アドヴァヤヴァジュラ著作集: 梵文テキスト・和訳 (2)」『大正大学

- 総合仏教研究所年報 11』, 1989.
「アドヴァヤヴァジュラ著作集：梵文テキスト・和訳 (4)」『大正大学
総合仏教研究所年報 13』, 1991.
- 望月海慧 『全訳アティシャ 菩提道灯論』 起信書房, 2015.
- Naudou, J., *Buddhists of Kaśimīr*, Agam Kala Prakashan, Delhi, 1980.
- Newman, J., The Paramādibuddha (The Kālacakra Mūlatantra) and its Relation to The Early
Kālacakra Literature, *Indo-Iranian Journal* vol.30 no.2, 1987.
The Epoch of the Kālacakra Tantra, *Indo-Iranian Journal* vol.41 no.4, 1998.
- Orofino G., *Sekoddeśa A Critical Edition of the Tibetan Translation with an Appendix by Raniero
Gnoli on the Snskrit Text*, Serie Orientale Roma vol.72, 1994.
- Roerich, G.N. tr. *The Blue Annals*, Delhi, Motilal Banarsidass, 1976.
- Szántó, P. D., The Case of the Vajra-Wielding Monk, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum
Hung.*, vol.63(3), 2010.

-
- 1 筆者は積極的な意味で「インド密教」の用語は用いない。日本密教の伝統教学がそのルーツをインド仏教に探る当然にして正当な欲求が、実はインド仏教に「顕密対弁」を根幹とする教学のヴェールを被せることとなっていること、その結果、自立したインド仏教を日本密教の枠組みに従って構成することで生み出された「インド密教」なるフィクションが誰にも疑われることのない前提の大枠となり、宗門（世界内存在）の研究者が決して対象化できない「共同観念」となってしまう。この問題にはまた別稿を期したい。
- 2 静 [2007: 17~29, 57~62]
- 3 羽田野 [1987:36~49]
- 4 Toh 1866 Vitapāda 作『麗華』 89b4-90b3.
- 5 静 [2007: 152~153]
- 6 GS p.5, evaṃ mayā śrutam / ekasmin samaye bhagavān sarvatathāgatakāyavākcihṛdayavajrayoṣidbhageṣu vijahāra /
- 7 Toh 1198 Cha.198b7-199a2.
dus kyī 'khor lo dang de'i rjes su 'brang ba'i gzhung rnam su theg pa gsum dang 'gal ba'i rnam par gzhag pa mang po rnam bya ste / de'i gzhung byed pa grags pa dang padma dkar po dang rdo rje snying po dang phyag na rdo rje'i ming can de rnam byang chub sems dpa' rnam ma yin pa kho na'o zhes mang du shes pa rnam smra'o //
- 8 前者が羽田野伯猷、Newman であり、後者が古くはチョーマ・ド・ケレス、現在では Giacomella Orofino である。Orofino と Newman は同時代人であり、互いに相手の見解を承知していることから、この問題は決着を見ていないと考えざるを得ない。
- 9 Newman[1987:97~98] は、根本タントラの存在を以下の 7 点から導き出している。
1. LKC と VP の両典籍は『最勝本初仏』を前提としている。
2. インドとチベットの伝承は Sekoddeśa が『最勝本初仏』からの抽出であることで一致して

- いる。
3. 根本タントラの他の章品が独立した形で流布していたと思われること。
 4. VP には『最勝本初仏』からの多くの引用があること。
 5. VP 第一章は『最勝本初仏』の論点を 81 に分けるが、それらの記載順は LKC における同一事項の記載順とは異なること。
 6. VP 以外にも、インド撰述の時輪典籍には『最勝本初仏』から数多くの引用が見られること。
 7. VP の作者プンダリーカが実際に『最勝本初仏』を学んだと主張していること。
- 10 羽田野 [1987: 32] の見解は以下である。
 如上の結論から類推して、『時輪タントラ』の著者を大時足 (Dus zhabs chen po)、『無垢光』のそれを小時足 (Dus 'khor pa) となすを妥当とするかにみえる。(中略) マガダを中心とする大小時足の時輪活動は、早くも 1040 年をさかのぼりえず、時輪教の一般的流布は、1000 年の中葉から 1100 年代のはじめにかけて果たされたということである。
- 11 VP vol.2, p.144LL9-10., 望月 [2015:151~152], Szántó[2010:297fn.26,27]
- 12 Cicuzza [2001:25~26]
 ヴェジラパーニは、西藏大蔵経では〔論書・註釈書の〕作者で翻訳者として言及される。『青冊史』では、カーラチャクラタントラに割かれた章の末尾で「サンヴェアラの註釈書の作者」として一度だけ名が挙げられており、マハームドラーに割かれた章では数回出て、そこには簡単な伝記がある。この人物は明らかに LTT を書いたヴェジラパーニと同一人物である。しかし、『青冊史』が示唆する彼の生誕年丁巳 (AD1017) は他のカーラチャクラの作者たちの時期とは相応しない。
1. Mahāvajradharastotra, Toh 1126, Ota 欠, 『大持金剛讚』.
 2. Ṣaḍaṅgayoga-nāma, Toh 1364, Ota 2080 『六支瑜伽』.
 3. Lakṣābhīdhānād uddhṛtalaghutrantrapiṅḍārthavivarāṇa-nāma (LTT), Toh 1402, Ota 2117.
 4. Tattvagarbhasādhana-nāma, Toh 1426, Ota 2143 『真実心髓成就』.
 5. Nīlāmbaradharavajrapāṇiyakṣamahārudra-vajrāgnijihvatantravṛtti-nāma, Toh 2166, Ota 3015.
 6. Bhagavatīprajñāpāramitāhṛdayatīkārthapradīpa-nāma, Toh 3820, Ota 5219
 7. Vajrapada-nāma, Toh 2255 『金剛句』.
 8. Bhāvanākramaṣaṭaka-nāma, Toh 2299, Ota 3148 『修習六次第』.
 9. Guruparamparakramopadeśa-nāma (GPU), Toh 3716 『上師相承次第口訣』.
- 14 Cicuzza[2001: 24~25] は、LTT が「菩薩の三部作」の他の二書、VP, HTPṬ に引用されていること、および LTT と HTPṬ には LKC からの引用はないことの二点から、根本タントラとされる『最勝本初仏』(SU はその内の一章)を除くと、時系列的には、LTT は現行の LKC よりも成立が古いと論じる。つまり先後関係は以下である。『最勝本初仏』—LTT—HTPṬ—LKC—VP.
- 15 Advayavajra は波羅蜜乘の見を考察して、それを鈍根・中根・利根の三種に開き、経量部を鈍根の大乘に位置づけている。このユニークな「経量部大乘説」を踏襲しているのが GPU である。
- 16 LTT pp.123L16~124L7.
 iha vajramaṇāv antargatam bodhicittam antargatamana ity ucyate / tenāntargatena manasā 'cyutabodhicittena karmamudrāpasaṅge jñānamudrāpasaṅge vā traidhātukalakṣaṇam buddhabimbaṃ bhāvayed iti / traidhātukaṃ kāmarūpārūpalakṣaṇam sthīracalabhāvasvabhāvātmakaṃ sarvākāravaropetaṃ bhāvayed aśeṣato yogīti / tad eva prajñāpāramitā sarvākāravaropetā sā cāsmin tantrē **kāmasiddhir** ity uktā bhagavatā prajñātantratvād iti / tāṃ kāmasiddhiṃ **bhāvayed** yogī / iha kāmo mahārāgo vajrasattvo mahārthaḥ paramākṣaraḥ / siddhir (p.124) mahāmudrā prajñāpāramitā sarvākāravaropetā iti / athavā kāmo nirālambā mahākaruṇā siddhir sālambā mahāśūnyateti yogināṃ svasaṃvedyatvād

- iti / karmamudrājñānamudrāsiddhyor uttarā siddhiḥ / tām mahāmudrām kāmasiddhiṃ sarvajñatām sarvākārajñatām mārgajñatām mārgākārajñatām daśabalacaturvaiśāradyādibuddhaguṇadāyākīm bhāvayed buddhatvāya / iti tantrāntareṣu tathāgataniyamah /
- 17 LTT p.124L11~16 punaḥ karmamudrām jñānamudrām parityajya mahāmudrām bhāvayen mahāsukhavṛddhaye / iha karmamudrājñānamudrābhāvanāpratiśedho **dvādaśasāhasrike paramādibuddhe** bhagavatoktaḥ / tathā ca **bhagavān** āha—
karmamudrām parityajya jñānamudrām vikalpitām /
paramākṣarayogena mahāmudrām vibhāvayet // iti /
- 18 LTT p.124L22~25.
iha prajñōpāyātmake tantrarāje bālānām pratipattartham karmamudrānurāgeṇodbhūtam dvīndriyajam kṣarasukham prajñājñānam ity āha bhagavān kila laukikasatyena / na tat paramārthasatyena /
- 19 GS 18.113a-f.
20 HV2.3.10ab.
21 SU10.
22 SU 8.
23 SU15-17ab.
24 LTT pp.125L23~127L14.
atra prajñānge laukikalokottarasatyenābhiṣekāś catvāraḥ / teṣu trayo lokasaṃvṛtyā caturthaḥ paramārthata iti / sa ca yogagamyah paramārthasatyenāvagantavyah sadgurūpadeśataḥ / tathā ca **samājottare** bhagavān āha—
abhiṣekaṃ tridhā bhinnam asmin tantre prakīrtitam /
prathamam kalaśābhiṣekaṃ dvitīyam guhyam iṣyate /
prajñājñānam tṛtīyam tu caturtham tatpunastathā // iti /
catvāro 'bhiṣekāḥ / tathā **hevajrādike** /
ācāryaguhyaprajñā ca caturtham tatpunastathā /
(p.126) iti evam ubhayatantre catvāro 'bhiṣekāḥ / abhiṣekakramapāṭhāt / na te tāvad ānandādikṣaṇā vicāryamāṇā bhavanti / tathā **māyājālādike** udakādīsaptābhiṣekāḥ pṛthag avagantavyā vicakṣaṇair iti /
tathā **ādibuddhe** bhagavān āha—
udakaṃ muktaḥ paṭṭo vajraghaṇṭo mahāvratam /
nāmānujñāsamāyuktaḥ sekaḥ saptavidho nṛpa //
ity **adhībuddhādike** / ataḥ kalaśābhiṣekaṃ saptasekānām uttaram pṛthag / athavācāryābhiṣekāḥ pṛthag uttarānām trayānām prathamam dvitīyam guhyābhiṣekaṃ prajñājñānam tṛtīyam cābhiṣekaṃ / teṣāṃ trayānām uttarottaram caturtham tatpunastathābhiṣekaṃ lokottaram iti / evaṃ catvāro 'bhiṣekā abhiṣekakramapāṭhād iti kāyavākcittajñānaviśuddhyartham bhagavatoktāḥ / eṣu caturtho 'bhiṣekā sahañānando na bhavati ubhayasatyābhyām api / yadi syāt tadā caturṇām ānandānām kramo bhavati / evaṃ ced ānandaḥ kalaśābhiṣeko bhavati / paramānando guhyābhiṣeko bhavati / viramānandaḥ prajñājñānābhiṣeko bhavati / sahañānandaś caturtham tatpunastathābhiṣeko bhavati / evam avyavasthā ānandādikṣaṇabhedenābhiṣekāṇām bhavati / na caivam / atra lokasaṃvṛtyā kalaśābhiṣiktaḥ ācāryābhiṣiktaḥ / guhyaprekṣanenāmṛtāsādanena guhyābhiṣiktaḥ / karmamudrāsamarpaṇena dvīndriyajakṣarasukhāvabodhena prajñājñānābhiṣiktaḥ / manyantargatabodhicittasukhāvabodhena caturthaprajñājñānenābhiṣikta ity / laukikasatyena neyārthena sekavidhiś caturvidhaḥ / paramārthataḥ punar eṣa vicāryamāṇo nirarthakaḥ / iha yadi prathamam kalaśābhiṣeke śiṣya ācāryo bhūtas tadā guhye

prajñājñāne caturthe ca ko 'sau bhaviṣyati / ācāryatvaṃ vajrasattvatvaṃ nāma / tat katham prathamam
kalaśābhīṣekenābhīṣikta ācārya iti / tasmād iyaṃ bhrāntir bālayanāṃ yā yuktyā na ghaṭatī / iha tantrāntare
saṃdhyābhāṣāntareṇa nīrārthena punaḥ kalaśāśbdena stanāv ucyate / tatsaṃsprasād yat kṣaram sukham
sa kalaśābhīṣekaḥ / guhye vajrāsphālanād yat kṣaram sukham sa guhyābhīṣekaḥ / dvīndriyasamāpattau
yat spandasukham sa prajñājñānābhīṣekaḥ / mahāmudrānurāgeṇa yad akṣarasukham sa caturtham
tatpunastathā(p.127)-bhīṣekaḥ / evaṃ kṣarakṣaraspaṇḍaniḥspandabhedena catvāro 'bhīṣekāḥ / abhiṣicyate
'neneti abhiṣekaḥ / sukhacittam kriyata iti arthaḥ / atra **paramādibuddhe** bhagavān āha—

ādau saptābhīṣeko yo bālānām avatāraṇam /

trividho lokasaṃvṛtyā caturthaḥ paramārthataḥ //

kumbho guhyābhīṣekaś ca prajñājñānābhīdhānakaḥ /

punar eva mahāprajñā tasyā jñānābhīdhānakaḥ /

kṣaraḥ kṣaras tataḥ spando niḥspandaś ca tato 'paraḥ /

kāyavākcittasaṃsuddhyā abhiṣekatrayaṃ kramāt //

caturtho jñānasamāśuddhiḥ kāyavākcittaśodhakaḥ /

iti / evaṃ catvāro 'bhīṣekāḥ / eṣāṃ pratyeye 'bhīṣeke catvāra ānandāḥ / ekaikānande

kāyavākcittajñānabhedena catasro 'vasthāś caturbindubhedene / evaṃ ṣoḍaśakalābhedena pratyeye

'bhīṣeke ṣoḍaśānandāḥ kāyavākcittajñānabindubhedena catvāraḥ /

- 25 『ダーキニー金剛網』の skt. 原文は Vajrāvalī で知ることができる。Mori[2009: 476], 桜井 [1996: 355,478]

Toh 419 Na64b1-3.

chu yid bang ni dang po ste // cod pan dbang la gnyis pa'o //

rdo rje dbang gis gsum pa ste // rang gi bdag po bzhi pa nyid //

ming gi dbang bskur lnga pa ste // drug pa rdzogs pa'i sangs rgyas nyid //

bdun pa bum pa'i dbang gis te // gsang ba'i dbang gis brgyad pa'o //

shes rab dbang las dgu pa ste // de nyid rdo rje'i sbyor ba yis //

kun gyi de nyid brtul zhugs brjod // ston pa rang gis lung bstan te //

de 'dir dbang gi cho ga'o // slob dpon smad par mi bya ste //

bde gshegs bka' las 'da' mi bya //

- 26 LTṬ p.129LL3~16.

punas tatraiva **pañcadaśame paṭale** coktam—

prathamam toyasekena dvitīyam maulisekataḥ /

ṭṭīyam paṭtasekena caturtham vajraghaṇṭayoh //

pañcamam svādhīpenaiva nāmasekam tu ṣaṣṭamam /

buddhājñā saptamam sekam kalaśam sekam aṣṭamam //

navamam guhyasekena daśamam prajñābhīṣekataḥ /

tattvavajraprayogeṇa sarvān vajravratān dadet /

vyākaroti svayam śāstā eṣa sekavidhiṃ svayam /

ācāryo nāvagantavyaḥ sugatājñāṃ na laṅghayet // iti /

evaṃ ekādaśo 'bhīṣekaḥ pradhānam tattvavajraprayogeṇeti bhagavato vispaṣṭavacanāc caturtho

vaikādaśo vā 'bhīṣeko prthag evāvagantavyo vidvadbhir iti / evaṃ sarvam sadgurūpadeśena bahuśrutena

tantratantrāntareṇāvagantavyam mokṣārthibhiḥ / iti mahāmudrābhāvanā sekavidhinā antargatena manasā

bhagavatoktā //

27 Toh 3716 Tsu.170a5-6.

de bzhin du dbang la yang gnyis te / 'jig rten pa'i dbang bcos ma dang / 'jig rten las 'das pa'i dbang ma bcos pa'o // bcos ma la gsum ste / slob dpon gyi dbang dang / gsang ba'i dbang dang / shes rab ye shes kyi dbang ngo // ma bcos pa la gnyis te / chos kyi phyag rgya dang / phyag rgya chen po bzhi pa'o //

28 野口圭也「アドヴァヤヴァジュラ著作集・梵本テキスト・和訳(2)『大正大学総合仏教研究所年報 11』,1989, p.236.

29 Toh 3716 Tsu.170b3-4.

de nas phyi bskyed pa'i rim pa rdo rje slob dpon gyi dbang lus rnam par dag pa bshad par bya ste / chu'i dbang dang / cod pan dang / rdo rje dang / dril bu dang / ming dang / rigs(P rig) gsum gyi dam tshig dang / snod du bya ba dang / rjes su gngang ba dang / rdo rje brtul zhugs dang / lung bstan dang / dbugs dbyung ba dang bcu gcig go //

30 Toh 3716 Tsu.173b3-7.

da ni de bzhin gshegs pa'i dbugs dbyung ba'i zab mo bskyed pa'i rim pa dang / rdzogs pa'i rim pa la sogs pa bstan pa'i phyir rim pa lnga rim pa(D om) bzhir 'dus te / las kyi phyag rgya dang / cho kyi phyag rgya dang / phyag rgya chen po dang dam tshig gi phyag rgya'o // de la dbang po rab kyi dbang du byas te las kyi phyag rgya la rim pa gnyis 'dus te / las kyi phyag rgya'i dus su tha mal pa'i 'du shes kyis ma(D om) gsungs pas lha'i ngo bor bsgom zhing mkha' gsang byin gyis brlabs(P brlab) pa ni phyi bskyed pa'i rim pa'o // (P195b) de nas bo la dang ka kko(P ko) la srub cing bsrub(P srub) pa'i sbyor bas de bzhin gshegs pa'i dbugs dbyung ba'ang rdo rje 'chang gi dbugs dbyung ba lnga ba'ang(D lnga) rung ste / lhan cig skyes pa'i ye shes rang rig pa nyams su myong ba ni nang zab mo bskyed pa'i rim pa'o // de ltar las kyi phyag rgya la rim pa gnyis dang ldan pas na rim pa bzhir 'dus te las kyi phyag rgya ni dpe'o // chos kyi phyag rgya ni rdzogs pa'i rim pa ste lam mo // phyag rgya chen po yongs su rdzogs pa'i rim pa ste 'bras bu'o // dam tshig gyi(D om) phyag rgya ni mnyam gzahag dang rjes thob dang / chos sku dang gzugs su gnyis su med cing zung du 'jug par(P om) ston pa ni(P na) ngo bo nyid kyi rim pa ste gzhan gyi don du byung ba'o //

31 HV 2-3-7,8, 磯田 p.133, fn.(33), 2-3-7,10.

32 HV 2-3-9.

33 Toh 3716 Tsu.174b2-175a2.

'khyud dang 'o byed la sogs pa // sna (P196b) tshogs rnam pas sna tshogs bshad //

rnam par smin pa de las bzlog (P zlog) // bde ba'i ye shes za ba nyid //

bdag gis bde ba zos pa yi // ros ni rnam par nyed pa brjod //

mtshan nyid bral ba gsum las gzhan // chags dang chags bral rnam par spangs //

zhes gsungs pa'i tshig gis ni gong du gsungs pa lhan cig skyes pa zos pa ni nyams su myong ba ste / physis bzhi pa dga' bral gyi dus na grogs ni gong ma la rtog cing dpyod pa ste / rtog pa nyid yin gyis(P gyi) mi rtog par grub pa ma yin no // yang drag po'i sbyor ba'i gzhung gis rnam par nyed pa nyid rtog pa dang bca'd pa yin yang gnod par mi 'gyur te bsrub par bya ba dga' bral ni mi rtog pa yin no zhe na / 'di skad du /

sna tshogs dang po dga' ba nyid // rnam smin la ni mchog dga' nyid //

rnam nyed dga' bral dga' ba nyid // mtshan bral lhan cig skyes pa nyid //

ces gsungs pa des dga' bral ni rnam par nyed pa'i skad cig ma nyid du gsungs so // rnam par nyed pa rtog pa dang bcas pa yin pas dga' bral yang rtog pa dang bcas pa yin par shes par bya'o // de bzhin du gzhan yang / dang por dga' ba 'gro ba'i gzugs // de bzhin mchog dga' 'gro ba nyid //

dga' bral dga' ba 'gro ba nyid // gsum pa lhan cig skyes pa med //

ces bya ba yang gnod pa ste / 'gro ba ni 'khor ba'o // 'khor ba ni rtog(P rtogs) pa'i ngo bo 'khrul pa yin pas

na dga' bral yang rtog pa dang bcas pa nyid du shes par bya'o // des na drag po'i gzhung gis bsgrub(P sgrub)
 bya dga' bral nyid kyang nyams par 'gyur ro // des na(P de bas) dga' bral gyi dga' ba ni brgyud nas grangs
 kyi gsum pa la (D175a) bshad kyang don gyis bzhi pa la go bar bya'o // lhan cig skyes pa grang kyi bzhi pa
 la bshad kyang don gyis gsum pa la rig par bya'o //

'o na ci'i phyir rgyud dag las yang dag dbang bskur gyi rim pa lhan cig skyes pa gsum pa la ma bshad pa
 ci'i phyir zhe na / de ni ma yin te / (P197a) glegs bam la mkhas pa phyi rol la sogs pa'i mkhas pa rnams bla
 ma la mi ltos par sgra yis tshig gtan la phab ste / tshad ma'i don gtan la phab nas sngags kyi don zab mo
 dbang za bar byed pa de rnams dgag pa'i phyir rgyud du dkrugs pa'o //

34 Toh 3716 Tsu.179a3-4.

ci phyag rgya chen po la yang dga' ba(P om) bzhir dbye'am ci zhe na / de ni ma yin te / phyag rgya gsum la
 dga' ba bzhir dbye'i phyag rgya chen po la ma yin no // de ci'i phyir zhe na / phyag rgya chen po ni dri ma
 dang bral ba'i 'bras bu ste / de bas na skad cig ma gsum dri ma dang bcas pa 'dir mi 'byung bas des phyé
 ba'i dga' ba gsum yang 'dir mi 'byung ngo // des na dga' ba bzhir mi dbye'o //

35 Toh 3716 Tsu.182b1.

de lta bu'i phyag rgya chen po las sems can gyi don du 'bras bu gzugs kyi sku gnyis 'byung ba ni dam tshig
 gi phyag rgyar bshad de /

36 大観慈聖 [2016: 27~69]

37 羽田野伯猷の見解（註8）「時輪教の一般的流布は、1000年の中葉から1100年代のはじめにかけて果たされたということである」は、年代を下げすぎていると思われる。

〈キーワード〉

ヴァジラパーニ カーラチャクラ 時輪教 最勝本初仏 無垢光 上師相承次第口訣

65 金剛乘における複数のヴァジラパーニについて（静）